

人やものとかかわることを大切にした支援のあり方

—養護学級総合学習「おまつりをしよう」の実践から—

関 和 典

1 はじめに

児童が学校生活を行っていく上で必要となっていくことは、児童がいろいろな見通しをもって登校し、そのことを実現していく中で達成感や成就感をもつことであると考え。その中には、「〇〇くんと〜がしたい。」とか「〇〇(もの)を使って遊びたい。」とかという児童が見通しの中から見つけた手がかりとなるものが必ずと言っていいほど存在していると考え。

本学級では、「生活力のある児童」として3つの力を掲げているが、昨年度から「さまざまな集団やいろいろな人とかかわり合いの中で生活や学習をする力」にスポットを当てて研究を進めてきた。昨年度同様今年度も以下のような3点を具現化するものとしてとらえた。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">① 児童が自己を表現できるような肯定的な環境が存在していること。② 児童がかかわり合い影響しあう友だちや指導者が身近にいること③ 児童がかかわることを促進するような適切な具体物(教材・教具)があること |
|--|

また、今年度は、集団でのかかわりについて検討し、「障害児教育」中にあるの表について細分化していくことを念頭に置きながら研究を進めていく。

さらに、来年度からの新しい教育課程の実施に向けて「総合的な学習」の実施をにらんだ学習のあり方についても実践を深めていきたいと考える。

2 養護学級の「総合学習」と「総合的な学習」の実施に向けて

(2) 本校が実践してきた「総合学習」について

本学級はこれまで、学校行事と生活単元学習を、活動を通して内容を指導するという観点から、6つの項目に区分して「総合学習」という枠組みで取り組んできた。本校独自のこの学習の形態は、生活単元学習との色分けが明確でなく、さらには来年度から実施される「総合的な学習」と呼び方も内容もはっきりとした相違点を示すことのないまま今年度を迎えることとなった。

そこで、学習指導要領の改訂に伴う「総合的な学習」のねらいや配慮事項にしたがい、本学級で取り組んできた「総合学習」を「総合的な学習」と「生活単元学習」とに整理・分類することとした。

これから述べる「総合学習—おまつりをしよう—」の実践は、自分たちの学習を多くの友だちや教職員に向けて広くかかわりをもとうとする学習であることから、来年度は「総合的な学習」として取り組んでいこうとするものである。本校の「総合的な学習」のねらいは以下の通りである。

身の回りの環境とかかわり合いながら、主体的に問題の解決や探求活動に取り組み、生活力を高めることができるようにする。

3 指導の実際

(1) 総合学習「おまつりをしよう」について

児童にとって、日常生活の他に自分たちの楽しみにしている行事があるということは、日々の学習意欲につながるだけでなく、学習の見通しをもつ手がかりともなる。本学級では、その中の一つに「おまつり」を設定している。「おまつり」では、児童が日常行ってい

る調理活動や遊びの中から児童が選択・決定したものを、他の児童や教職員、保護者を招いて行う中で、自分たちが楽しむだけでなく他者に対して働きかけるという点から、様々な人間関係をもち、自己表現や仲間づくりが期待できると考えた。

児童は、自分たちの住んでいる地域の中での「おまつり」を経験していて、個々に「おまつり」のイメージや、「おまつり」に直接結びつくような「もの」を想起することができると考えられる。例えばある児童は地域のおまつりに行って自分の好きな食べ物を買って食べていることから、その食べ物とおまつりが結びついていると考えることができるし、ある児童は、既に本学級の「おまつり」を経験していて、自分が行ってきた学級でのお店についての記憶を手がかりにして「おまつり」の学習の流れや、必要なものを想起することができるといったことである。以下に本単元における児童の実態と課題について

(2) 本単元における児童の実態と課題について

	実 態	課 題	児
か か わ り	指導者と一緒に活動する。	指導者のことばかけによって活動することができるようになる。	②⑤
	指導者のことばかけで活動する。	友だちの様子を言語化することで、そのことを手がかりに活動することができるようになる。	①⑨
	指導者のことばかけや友だちの動きを手がかりに活動する。	友だちの働きかけを促すことによって他の友だちの行動を見て活動することができるようになる。	③④ ⑧
	友だちの動きを手がかりに活動する。	自分から友だちに働きかけることができるようになる。	⑭
	集団での活動の仕方がわかり自己主張しながら友だちとかかわって活動する。	自分の考えと友だちの考えを比較したり、友だちのことを考えたりしながら活動できるようになる。	⑥⑦ ⑩⑮
	集団の中での活動の仕方がわかり、自分と友だちの考えを比較し調整を図りながら活動する。	集団の中で適切な意見を出し、全体のバランスを考えた行動をとることができるようになる。	⑪⑫ ⑬
選 択	好き、嫌いの好みの視点が明らかになって選んでいる。	指導者や友だちの活動に目を向けて選ぶことができるようになる。	①② ⑤⑨
	友だちや指導者の活動への関心から選んでいる。	指導者のことばかけや友だちの活動を言語化することで次の見通しをもって選ぶことができるようになる。	③④
	友だちや指導者の活動を見て見通しをもった方を選んでいる。	既習の事柄を想起することで、その事柄の大まかな全体像をつかんで選ぶことができるようになる。	⑥⑦ ⑧⑭
	過去の経験から見通しのもちやすい方を選んでいる。	自分の興味・関心だけでなく他者からの働きかけに対しても目を向けながら選ぶことができるようになる。	⑩⑪ ⑫⑮
	自分にとって乗り越えなければならぬ課題の有無で選んでいる。	自分の好みだけでなく、全体のバランスを考えた内容を選ぶことができるようになる。	⑬

前頁の実態と課題をふまえて、児童がより多くのかかわりをもつことができるよう指導に当たって以下のような手だてを考えた。

- 児童自らの手で「おまつり」を企画・運営することができるよう、手順を示した「おまつりノート」を提示して手がかりとする。
- お店に来る人たちとより多くのかかわりをもつことができるよう、来店する人たちの「ビデオレター」を作成し、提示する。
- 具体的な活動がイメージできるようにするために、活動の見通しとなるような具体

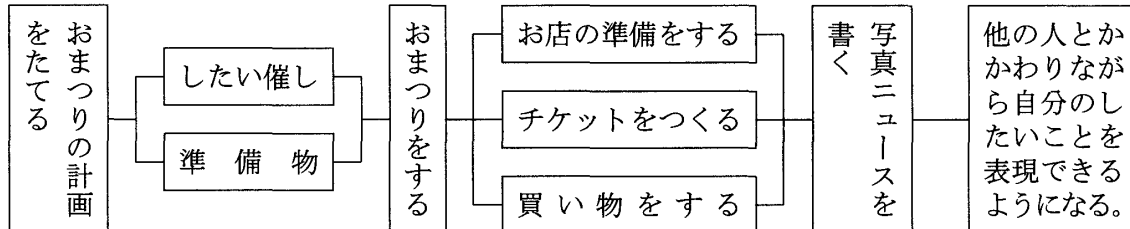
物や手順を提示する。

このような手だては以下の指導目標の1, 3につながっていくものである。

(3) 指導目標について

- 1 友だちと一緒におまつりの活動ができるようにする。
- 2 自分のしたい催しを選ぶことができるようにする。
- 3 自分たちの催しを工夫して準備することができるようにする。

(4) 指導内容と計画について



(5) 授業仮説について

授業を進めていく上で以下のような仮説を設定した。取り組みの方法としては、上の手だてを基本にしている。

児童がおまつりの経験や招待する人を想起する場を設定すれば、自分たちのおまつりの準備物の中から何を作るか決めていくことができるであろう。

(6) 第一次について

第一次第1時では、各クラスごとに自分たちのやりたいお店を考えることから始めた。児童は自分たちの過去の経験や、「おまつり」に対するイメージの中から自分のやりたいお店を発表する。発表の仕方は、ことばで自分の思いを表現する児童、自分の思いをカードの中から選択する児童、具体物を実際に食べてみて、その中から具体物を選択することで表現する児童がいた。

第2・3時では、養護学級全体の授業とし、おまつりを行う上で必要なものや、分担して準備することを全体の場で知らせていきながら、自分たちの準備するものや実際の手順等について、支援をしていきながら進めていった。詳細は次頁に示すこととする。

(7) 第二次について

第二次からは再び各クラスでの活動とした。それぞれのクラスでお店を決めているのだから、実際に店の準備やチケットづくり、買い物等はそれぞれのクラスで行った方がより児童の見通しをもつことにつながると考えらからである。児童は、自分たちで決めたお店に対してそれぞれ思い入れがあり、そのことを大切にしながら活動を展開していった。ここでは、自分たちのお店に来てもらう人や、その食材について想起するようにしながら進めていくことは言うまでもない。

(8) 第三次について

おまつりを実際に行い、そこで楽しかったことをその日に撮った写真を提示し、そのことを手がかりとしながら「写真ニュース」を書いていった。写真に写っていることだけでなく、実際の場面でことばかけをしたり、活動を共にした友だちの発言等によりより豊かな表現をすることができるように支援をしていった。

(9) 第一次第3時の目標について

以下に本実践の具体的な内容について示す。第一次第3時では、前述したように児童がどんなものを準備すればいいか、またその手順はどうかということについて以下のような目標を立てて実践をしていった。

おまつりで分担して準備するものがわかり、何を作るか決めることができる。

(10) 目標行動と指導者の支援について

目 標 行 動	教 師 の 支 援	児
自分のやりたいことを選択肢の中から決めることができる。	児童がイメージしやすいような具体物を提示する。	①②⑤ ⑨
準備するものがわかり、その中から自分のやりたいことを決めることができる。	準備するものが想起できるようなVTRや具体物を提示する。	③④⑧ ⑭
自分のやりたいことを全体の場で表現し、自分のやりたいことを決めることができる。	準備するものを想起できるようVTRや具体物を提示したり全体の場でことばかけをしたりする。	⑥⑦⑩ ⑮
分担して準備することがわかり、学年等のバランスを考えて自分のやることを決めることができる。	希望を聞いていく中で、学年のバランスに着目するようなことばかけをする。	⑪⑫⑬

(11) 学習の展開について

学 習 活 動	予想される活動	教 師 の 働 き かけ	
		全 体	個 別
1. 始まりのあいさつをする。 2. どのような準備が必要かを知る。 	2. ・画面から視線がそれられると思われる。(児①②⑤⑨) ・すぐに必要なものと言うであろう。(児⑥⑦⑩⑪⑫⑬⑮) ・すぐには必要なものが出てこないと思われる。(児③④⑧⑭)	1. 学習の始まりとして毎時間位置づける。 2. ◎どのような準備が必要かを知るためビデオレターや写真・実物を提示する。	1. 本日の当番児童にことばかけをする 2. ◎児①②⑤⑨には適宜具体物を提示していく。 ・児⑥⑦⑩⑫⑬⑮には賞賛し他児のモデルとする。 ・児③④⑧⑭には上記児童が発言したことについて繰り返し言語化する。
3. やりたいことを決める。 	3. ・自分のやりたいことをすぐに決めるであろう。(児⑥⑦⑩⑪⑫⑬⑮) ・すぐには決めることが難しいと思われる。(児①②③④⑤⑨⑭) ・最初は自分の思いだけでやりたいことを決めてしまうと思われる。(児⑪⑫⑬)	3. 決める際に児童に写真カードを渡す。また、児童がスムーズにきめることができやすいよう他児のモデルとなるような児童から指名していく。 ◎人数が極端に差がある場合を除いては児童の意思を尊重する。グループ内に下学年が集中する場合は全体で考える場を設ける。	3. ・児⑥⑦⑩⑪⑫⑬⑮には他児のモデルとなるようにする。 ◎児①②③④⑤⑨⑭には具体物を提示したり活動を実際に行ったりする。 ◎児⑪⑫⑬には下学年だけのグループができた場合にはことばかけをしていく。
4. グループで分かれて制作する。 	4. ・どんなことをするのかをグループ内で発表することができるであろう。(児⑪⑫⑬⑮) ・自分のやることを行動の形として理解することが難しいと思われる。(児①②③④⑤⑨⑭) ・作り方の見通しをもつことが難しいと思われる。(児③④⑥⑦⑩⑭)	4. ・グループ内でのリーダーを決めるようことばかけをする。 ・それぞれのグループでどんなことをすればいいかをリーダーが発表するよう促す。それぞれのグループは分かれて集合する。 ・自分たちのやることをリーダー主導で行うことができるようことばかけをする。必要があれば作り方などを支援する。	4. ・児⑪⑫⑬⑮にはそれぞれのグループで説明をするよう促す ・児①②③④⑤⑨⑭には実際に活動を行うようにする。 ・児⑪⑫⑬⑮には適宜ことばかけによって支援する。 ・児③④⑥⑦⑩⑭にはリーダーに注目するようことばかけをする。
5. 次時の確認をする。	5. ・次時についてのイメージがもちにくいとおもわれる。(児①②⑤⑨)	5. ・それぞれのグループでつくったものをどうするか話し合うようことばかけをする。	5. ・児①②⑤⑨には具体物やノートを提示する。
6. 終わりのあいさつをする。		6. ・始まりと同様に毎時間位置づける。	6. 本日の当番児童にことばかけをする。

4 考察

(1) 児童は、支援によって「おまつり」の内容や招待する人を想起することができたか。

教職員のVTRや、具体物の提示、さらには手順を示していくことによって、児童はおまつりに来てくれる人たちや、準備するものを想起することができたと考えられる。それは実際に学習を進めていく上で「〇〇先生に来てもらいたい。」とか、「〇〇がいます。」等の発言があったことから伺うことができる。

(2) 児童は、おまつりの準備物の中からどんなことをするかをイメージして、何を作るかを決めることができたか。

右の写真のように、児童は自分のやりたいことをカードを手がかりにして決めることができた。また、具体物を見ることや手順をみることでその具体物を示したり指さしをしたりして自分のやりたいことを決めることができていた。

しかし、すべての児童が自分のやりたいことを決めたときに、ポスターづくりを選んだ児童の中に、高学年の児童が全くいなかった。目標行動にもあるように、児童⑪⑫⑬には、このような状態になったとき、リーダーになっていくために、もう一度考えるようにする場面を設定しなければならなかったが、そのことが不十分だったため、ポスターづくりのリーダーが3年生になってしまった。その為、リーダー主導にならなければいけなかった指導案の学習活動4の部分が教師主導になってしまった。この部分については、目標行動が全く達成されなかったといえる。このことから、リーダーを中心とした活動を設定するための課題が明らかになった。

児童が自主的・自立的な活動を行っていくためには、自分のやりたいことを自分で表現することに加えて、同じ活動を共有していくためのグループづくりをした際に、リーダーを生活年齢や、発達段階、人間関係を考慮して設定し、確実に児童の自主的な活動を可能にするための手がかりとすることが必要であるということが、この実践からいうことができた。

また、児童①③④⑤⑥⑦⑧⑩⑭⑮には、適切であった支援だと考えられるが、児童②については、具体物を提示しても、「おまつり」のイメージはもちづらかったのではないかと考えられる。児童②がポスターづくりを選んだことは、本児の実態から考えても、よくイメージ化が図れていなかったと考えることができる。このことも今後の課題である。児童の実態にあった提示の仕方を再検討していく必要があると考える。

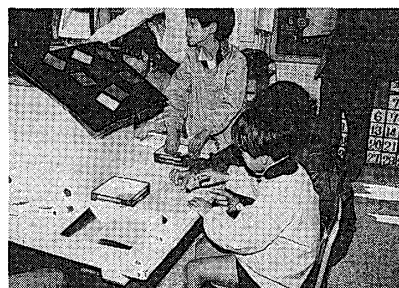
5 おわりに

本校の「総合学習」が来年度から大きく変わろうとしている。しかし、児童が自分たちの活動を自分達で作上げる「本人自治」的な活動がこれからも中心的な活動になっていくことは間違いのないであろう。そのことを肝に銘じていきたいものである。

自分のやりたいことを決める



おみこしづくりの様子



のぼりづくりの様子



ポスターづくりの様子

